

校長の率先垂範と教育委員会の 支援で「日々の授業」にこだわり抜く

和歌山県 有田川町立藤並小学校、有田川町教育委員会

有田川町立藤並小学校では、子どもの学力を高めるために、日々の45分の授業時間を大切にすることを授業改善の中心としている。その上で、同様の考えを持つ教育委員会の施策も活用しながら、教科担任制などのさまざまな取り組みを行っている。

学校概要

児童数598人。22学級（うち特別支援学級3）。
教員数32人。20代、30代前半、50代が多い。
*取材時（2010年3月）のもの

研究の方向性

- **日々の授業を大切にすることで授業改善**を目指す
- 校内授業研究会は節目として、現状の授業や子どもの姿を確認・共有する場と捉える

取り組みと成果

- **子どもや教師が45分の授業に集中できる環境**を整備
 - ≫ 1時間の授業が充実し、学習への集中力も向上
- 教科担任制を導入
 - ≫ 子どもの学習意欲が向上。教師の指導力も高まる
- 教師の主体性を重視した校内授業研究会の実施
 - ≫ 研究への意欲が高まり、日々の授業改善に結びつきやすくなる

成果を支える要因

- ◎ **校長先生の姿勢**
校内を頻繁に見て回り、教師と目線を共有。**リーダーシップを発揮する一方で、教師の意見も尊重**する
- ◎ **教育委員会のサポート**
「教員を元気にする」をモットーに、学校の主体性を重視する各種施策を打ち出している

和歌山県有田川町

◎2006年に吉備町・金屋町・清水町が合併して誕生。人口約3万人。古くから農林業が発展し、「有田みかん」の産地として有名。町立小学校16校、町立中学校6校を有する。04年から独自にALT2人を配置し、英語教育にも力を入れる。

有田川町教育委員会

所在地 〒643-0152 和歌山県有田郡有田川町大字金屋3

TEL 0737-32-3111

◎事務局の指導主事3人で小中学校22校を担当

S c h o o l D a t a

◎1886(明治19)年開校。
算数の授業では、1、2、4年生でチーム・ティーチング指導、3～5年生で習熟度別授業を行う。6年生は算数、音楽、「総合的な学習の時間」以外の7教科で教科担任制を導入している。



校長 久道憲生先生（2010年4月から）

児童数 591人 **学級数** 22学級（うち特別支援学級3）

所在地 〒643-0032 和歌山県有田郡有田川町天満439-1

TEL 0737-52-2069

URL <http://www.naxnet.or.jp/~fujinami/>

公開研究会 なし

*2010年4月時点

課題と研究の方向性

日々の45分間の授業を大切に

「授業は日々の指導を通して継続的に改善すべきと考えています。校内授業研究会もいますが、本校では一つひとつの授業を大切にすることを授業改善の中心に据えています」と、藤並小学校の栗山高明校長（当時）は語る。

子どもの学力を確実に向上させるため、栗山校長が教師に伝え続けているのが、「授業時間の『45分間』を大事にすること」だ。栗山校長は中学校教師だった経験があり、小学校に赴任して、小学校教師は授業時間に対する意識が甘いという印象を受けた。

「授業が時間内に終わらなければ次の時間まで延長したり、チャイムと同時に授業を始めなかつたりすることが、しばしば見られました。そのことが、休み時間が終わっても子どもがなかなか教室に戻らない一因になっていると思いました」（栗山校長）

日々の授業を中心に据え、校内授業研究会は「節目」として、指導内容や方法、子どもの姿などを確認・共有する場とする。赴任当時の研究会では学校全体で一教科を研究テーマとしていたが、そこにも課題を感じたという。

「教科への関心は先生によって異なり、例えば音楽専科の先生が担当外の教科の研究に

対して『蚊帳の外』と感じているようでした。どの先生も主体的、意欲的に参加できる校内授業研究会の体制にすることが、研究を活発にし、授業改善につながると考えました」

取り組みと成果

授業に対する意識を高める

まずは、子どもが落ち着いて授業を受けられる環境を整えることに重点を置いた。栗山校長は赴任してすぐ、「子どもや教師に一つひとつの授業の大切さを伝えるために校長として何が出来るか」を考え、毎日、休み時間が終わりに近づく¹と校庭に出て、子どもにも中に入るように促した。この間、教師は教室に入って準備を進める。

次第に、子どもの中に授業開始1分前に着席する習慣が定着し、どの学年も45分間の授業をきっちり行えるようになった。

「単に教室に戻るだけではなく、気持ちの切り替えも上手になり、授業開始後すぐに学びに向かえるようになりました」（栗山校長）
教師は授業の準備に集中できると共に、授業時間に対する意識も高まった。

教科担任制で

子どもにも教師にも変化

次に着手したのは、6年生における教科担



写真 休み時間に校庭で遊んでいた子どもは、栗山校長の姿を見ると校舎に向かって走り出す。勉強と遊びとのけじめを教える指導で、次第に切り替えが出来るようになる

任制の導入だ。教育委員会から1人の教師を加配してもらい、2005年度に始めた。栗山校長は導入の理由を「子どもに荒れの芽が見られたことが一因」と話す。

「複数の教師によって子どもを見取ること、学級崩壊のような状態に陥るのを未然に防ごうとしました。中学校の授業形態に小学生のうちから少しでも慣れておけば、『中1ギャップ』も解消できます。教師にとっては、同じ授業を別のクラスでも行うので、改善を反映させやすいですし、45分という時間への意識が高まるという期待もありました」

導入後に実施した子どもへのアンケートでは、9割以上が「教科担任制が良い」と回答した。「多くの先生とかかわれて楽しい」「気持ち切り替えられる」「専門の先生だから

つづけたくなる授業研究

授業が分かりやすく質問しやすい」「中学校のようでやる気になる」といった声が挙がる。教師にも変化が見られた。担当教科に対する責任感が強まり、教材や指導法の研究に積極的になった。また1クラスに複数の教師がかかわるため、教師の連携や協力が進んだ。更に、教師の持ち時間数が軽減され、時間的なゆとりが確保された。

教師の主体性を重視した授業研究

05年度からは、校内授業研究会での研究テーマを自分の関心に応じて選べるように変更。自主的な研究を促している。

「全員共通のテーマにすると研究は深まりやすいですが、それぞれが課題に感じているテーマを設定した方が、より意欲的に取り組めますし、自分の授業に活かしやすいと考えました」（栗山校長）

09年度は国語、社会、算数、理科、音楽の教科ごとに研究を進め、成果の共有を図った。「校内授業研究会に参加する際には自習にしてクラスを離れることがあります、それは日常の授業を大切にするという観点では望ましくありません。そのため、『全員が必ず年〇回授業を公開する』といったルールは設けず、実施時間などに配慮しています」（栗山校長）

「大研」という全員での校内授業研究会を低・中・高学年がそれぞれ年1回担当し、「小

研」という各学年担任での校内授業研究会を各学年で年3回実施する。小研は、関心のある教科であれば、他学年でも自由に参加できる。校内授業研究会では教師間の議論を大切に、栗山校長は議論を深めるコメントをする立場に徹する。

こうした校内授業研究会にした結果、教師がそれぞれ自分の関心のある教科や領域に取り組むようになり、研究への意欲が高まった。

◎成果を支える要因

校長先生の姿勢

校長と教師とが目線を共有する

「私は、普段は校長室にいない校長」と語るように、栗山校長は1日1回は全教室を見て回る。そして、休み時間には自ら校庭に立ち、直接の支援を行う。

「子どもの実態を自身の目で把握することで、教師と課題を共有でき、改善に向けた話がしやすくなります」（栗山校長）

同校には20代の若手教師が多く、教師間の力量の差が大きい。校長が授業を見て回ることで、アドバイスを個別に伝えられる。

教師の多様な考えを尊重する

教科担任制の導入には、町内で前例がないために反対する教師もいたが、栗山校長は導

入に踏み切った。その際、教師の考えも尊重し、「もしマイナスになるようなら1年間でやめましょう」と伝えた。

校長としてのリーダーシップを発揮して施策を提案すると同時に、教師間で徹底的に議論させる。そして、子どもの姿の変化など、教師の考えを聞いて、施策を改善していく。この栗山校長の姿勢は、校内授業研究会で教師の議論を重視することにも表れている。

教育委員会のサポート

「教師が元気になる」を目的に施策を考える

有田川町教育委員会（以下、町教委）でも、「日々の授業を大切にすること、毎日『当た



有田川町立藤並小学校校長
栗山高明
Kuruyama Takashi
「時代の流れに目を向けながらも不易の授業を大事にしたい」



有田川町教育委員会教育長
楠木茂
Kusaki Shigeru
「自己満足で終わらず、常に子ども目線で考えることが重要」



有田川町教育委員会課長補佐（指導主事）
片嶋博
Katashima Hiroshi
「教育は相手を変える仕事。同時に自分も変わっていく気持ちが必要」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

り前』を積み重ねていくことが授業改善につながる」（楠木茂教育長）と考え、学校を支援している。そのためには「教師の元気」が不可欠だと考える。

「教師が元気でなければ、授業改善の意欲は生まれませんし、子どもも生き生きと学べません。教師が快適に働ける環境を整えるのが先決と考えています」（楠木教育長）

特に重視するのが教師の自主性だ。「自分たちのしたいことが出来る」と思えば、教師が元気になり、学校は変わると考える。

学校が自由に使える 「学校奨励金」を予算化

学校の自主的な活動を制約する主な要因となっていたのは、予算上の問題だ。従来の予算体系では使途の制限が厳しく、学校が新しい活動を始めようとしても自由に動けなかった。そこで、03年度に使途を限定しない「学校奨励金」を予算化した。

09年度は有田川町として小・中学校全体で1200万円を予算化。各校で活動計画を立案し、年度末の校長のプレゼンテーションに応じて翌年度の配分を決める形式とした。

片嶋博課長補佐は、「使途は原則的に自由ですが、単発の行事ではなく、放課後の補習のための人件費や、特別支援教育の支援員手当てといった学力向上などに結び付く日常的な取り組みを推奨しています。最初は使いだ

を考えあぐねる学校もありましたが、次第に校長がリーダーシップを発揮するなどして独自の取り組みを提案し、各校の特色が表れるようになりました」と話す。

授業に集中できるよう 学校設備を充実

学校から提案された取り組みを支援する施策も行う。教師が自主的に考える雰囲気が出てきた中で、校長会で授業日数の確保を目的として夏休み短縮が提案された。それを受け、町教委は04年度から順次、各校にエアコンを設置した。楠木教育長は「校長会の自主的な判断を後押しし、暑い中で頑張る子どもや先生を支援したいと思いました」と語る。

大半の小・中学校で設置は完了したが、実際にはあまり使われていない。ただ、「エアコンがあることで、とても暑くなっても大丈夫だと思えます。こうした心のゆとりが活力の元になるのです」と、楠木教育長は言う。

09年度には全校に電子黒板を、10年度には教師に1人1台のパソコンを配備する。これらの設備費用や学校奨励金を確保できた背景には、町内に優良企業が多く、比較的財源が豊かであり、地域住民の教育に対する関心が高いことがある。ただし、町長や議会に予算化の必要性を丁寧に説明するなど、積極的な働き掛けが実を結んだ面も大きい。町財政に占める教育支出の割合が高く、町全体で学校

教育を支える体制は、学校と教育委員会の努力によりつくられてきたのだ。

事務作業効率化を推進

町教委は、各校の児童数や行事予定などのデータを集約して管理。県や国の調査・照会には出来るだけ学校に回答を依頼せず、町教委がまとめて対応する。各校に頻繁にあった問い合わせはかなり減少している。また、学校要覧（図1）はA4用紙1枚に書式を統一し、研究紀要は無駄に分厚くならないよう内容の厳選を呼び掛けるなど、書類の簡素化も進める。

「学校側の事務作業を出来るだけ減らし、子どもへの対応や授業の準備に集中してほしいという思いがあります」（片嶋課長補佐）

各校には取り組みをメールなどで報告してもらい、町教委が取りまとめて「学校&教委ニュース」（図2）を発行。町議会や和歌山県教育委員会などの関係機関に発信している。教育活動への理解を深めることが、教育予算の確保や地域からの協力につながり、結果として日々の教育の改善へ結び付く。学校の改善につながるという成果の実感と、メールでの報告という簡便性があるのだろう。報告の頻度は定めていないが、3日に1回は学校から報告が届く。

町教委では右記の施策の前提として、次のことを大切にしている。

つづけたくなる授業研究

図1 学校要覧(09年度)

有田川町立 藤並小学校 創立123年

住所 有田川町大馬439-1
TEL 52-2009
FAX 52-4491
E-mail fuji@nissai-hs.ac.jp

～学校教育目標～
「豊かな感性をもつ子、意欲的に取り組む子、たくましく生きる子を育てる」

～学校研究主題～
「学びあひ、高めあふ授業の創造」 一発間の工夫を通して～

1 沿革

1886年	「藤並小学校」創立
1887年	「藤並尋常小学校」と改称
1941年	「藤並国民学校」と改称
1947年	「藤並小学校」と改称
1957年	校舎落成式
1961年	高岡開校
2000年	現在の新校舎完成

2 主な行事

9/21	運動会 (5年生)
9/18・16	合唱祭
8/1～31	夏休み
10/29・30	修学旅行 (6年生)
11/6	社会見学
11/20	校内運動会
11/29	合唱発表

3 職員 38名

職名	人数	学年	専任
校長	1	4年	専任
教頭	1	5年	専任
副校長	1	6年	専任
教員	25		専任
教務主任	1		専任
学芸主任	1		専任
生活主任	1		専任
保健主任	1		専任
事務主任	1		専任
教員	2		非常勤
事務	2		非常勤
計	38		

4 児童数 599名

学年	男子	女子	計
1年	49	41	90
2年	50	54	104
3年	62	53	115
4年	51	52	103
5年	33	50	83
6年	47	52	99
専修	3	2	5
5 保護者数 441			

6 特色
1・2・4年生において算数科で「T」指導、3・4・5年生では習熟度別の授業（算数科）に取組んでいる。また、6年生において、教科担任制を導入している。これは、6年生において広まる教科の専門性を、個々の教師が持つ専門的知識を生かすことで、より解りやすく楽しく学習できる環境づくりを目指していることによる。

7 キーワード 「着実な一歩」

図2 学校&教委ニュース(09年度)

【学校&教委ニュース】第6号 平成21年度 有田川町教育委員会

藤並小・藤並中から届けたいニュースです。

みんなでチャレンジ、「製作り」!!
～地域の力に支えられた体験活動～

藤並小5年生(85名)は、持ちこんだ「田植え」体験をしました。梅雨時期にもかかわらず、好天に恵まれ、みんなさわやかな汗を流しました。

場所は、「わあ、冷たい」「暑かッッとする」などと騒がしかったですが、泥田の感触に慣れてくると子どもたちは次第に集中して植え始め、きれいに苗がそろうようになってきました。

地域の力がみんなのために働いて下さった「苗」。これからは、自分たちの思いも重なっていく筈です。みんなでしっかり見守り育てていきたいですね。

秋には立派に実り、収穫できるといいですね。

みんなでする「7つの約束」

① グループで皆でしよう!
② 出かけるときはおうちの人に声をかけよう!
③ 人通りの多い道を歩こう!
④ 外ではひびく声や足音を静かにしよう!
⑤ 買物かみもの店にぎやうをわらないうにしよう!
⑥ 危険なときは大声をさそう!
⑦ 近所の人や「きしゅう君の家」に助けを求めよう!

藤並小では、自分を守る方法を身につけるために、東海警察から4名の方を講師としてお迎えし、防犯教室を実施しました。

警察は、体験で身につけた知識を自分から上記「7つの約束」をしっかりと教えていただきました。

学校の登下校時や休み中、今日教えていただいたことを守って安全に過ごしましょう。

◎学校現場の声を聞く

学校が必要としている支援を正確に把握するため、楠木教育長らは学校を頻繁に訪れ、教師や子どもたちの本音を聞く。かつて町教委の訪問は公式な手続きを経て行われ、学校側も迎えるに当たって構えていたが、頻繁に足を運ぶうちに関係性に変化が生じてきた。

「学校側は当初、町教委の訪問目的を計りかねているようでしたが、私たちが本気で現場を理解したいから訪問している」と知ると、一緒に研究を進めていこうという一体感が生

「相手が変わってほしいなら、まずは自分が変わる必要がある」（片嶋課長補佐）という考えの下、初めに町教委が行動することを心掛けている。一連の改革でも、最初に施策を打ち出して環境を整え、現場の意識が自発的に変われるようにした。例えば、町教委が事務の簡略化を進めると、学校側にも「工夫によって事務などの負担は減らせる」という意識が芽生えた。こうして子どもにも接したり、授業を研究したりする時間が増え、授業力も向上していく。

◎迅速、かつ柔軟に対応する

活動は、まず行動し、難しさを感じたら途中でも止めて良いこととしている。「学校は『何かを始めたなら、すぐにやめてはいけない』と考えがちですが、もっと柔軟に対応しましょうと伝えていきます」と片嶋課長補佐は話す。

この方針により学校が新しい活動への挑戦や変化に前向きに取り組めるようになり、藤並小学校でも教科担任制に踏み切れた。栗山校長は、町教委の支援について次のように述べる。

「各種の施策を通じて『学校のしたようにやって良い』というメッセージ

栗山校長が重視する

校長としての役割

校長のリーダーシップによって進める部分と、教師の自主性を活かす部分は明確に区別しています。例えば、教科担任制の導入時には反対意見もあり、校長の私が決断しなければ実現は難しかったと思います。一方で、教師の授業力を高めていくには、校長が意見を言うよりも、個々の教師の自主的な研究を尊重し、教師同士の学び合いを重視する方が効果的だと思います。

本校では「着実な一歩」をキーワードに掲げていますが、これは子どもだけでなく、教師にも当てはまります。校長自身も出来ることから取り組み、学校全体を着実に前進させていきたいと考えています。

まれました。今では、学校側から『授業研究や取り組みと一緒に考えてほしい』と依頼されるようになりました」（楠木教育長）

◎最初に教育委員会が姿勢を示す

「相手に変わってほしいなら、まずは自分が変わる必要がある」（片嶋課長補佐）という考えの下、初めに町教委が行動することを心掛けている。一連の改革でも、最初に施策を打ち出して環境を整え、現場の意識が自発的に変われるようにした。例えば、町教委が事務の簡略化を進めると、学校側にも「工夫によって事務などの負担は減らせる」という意識が芽生えた。こうして子どもにも接したり、授業を研究したりする時間が増え、授業力も向上していく。

が伝わってきます。教育委員会から言われて取り組むと、どうしても『やらされている』という感覚になり、それが子どもにも伝わってしまいます。町教委の方針のおかげで、教師が『子どものために自分たちは何をすべきか』と考えるようになってきています」

ただし、町教委の方針の裏には、学校側に主体的な姿勢を強く求めていることがある。栗山校長のように明確な思いや計画があり、そこに外的な支援が重なったことで、学校改善が効果的に進んでいるのだ。